

民吉と佐々

加藤民吉は、瀬戸で磁祖として祀られている江戸後期の陶工。瀬戸でのより良い磁器焼の完成を目指して、先進地である肥前(長崎県・佐賀県)の磁器焼成技術を学ぶために九州に派遣された。肥後(熊本県)天草、肥前三川内を経て、佐々市ノ瀬皿山(長崎県北松浦郡佐々町)福本仁左衛門窯に入職、約2年間修業した。民吉の持ち帰った技術によって瀬戸の磁器焼成技術は飛躍的に向上、瀬戸は日本の一大陶磁器生産地として発展した。

第一部

市ノ瀬皿山(吉丸皿山)の始まりと終わり

市ノ瀬皿山(吉丸皿山)

市ノ瀬皿山は本来、吉丸皿山と呼ばれており、宝暦元年(1751)三川内江永の陶工福本新左衛門によって開かれた。おもに『くらわんか碗』を焼いていた。
(波佐見町学芸員 中野雄二)

三川内江永から佐々へ移住してきた最大の理由は薪不足と考えられる。『くらわんか碗』の需要増大により、波佐見を中心に登り窯が巨大化して中尾大新登窯(長さ170m 世界最大)等の巨大登窯が出現(1685年)、深刻な燃料不足に陥った。

佐賀藩有田・大村藩波佐見・平戸藩三川内の間で薪の争奪戦となり、流血の事態に至ることも度々あった。この状況を打開するため、寛保2年(1742)に三藩の役人が立ち合って境界確定作業が行われ、その基準となる三領石が建てられた。

もう一つの理由としては、磁器の原料である陶石を天草で船に積み、海上を通過して、そのまま佐々川を遡上し、皿山近くで陸揚げできたので、搬入コストが削減できたから、とも言われている。『くらわんか碗』は使い捨てにされる事もあり、いかに安く仕上げるかが問われていた。

淀川三十石船

江戸時代初期、世相の安定とともに京都と大阪を結ぶ交通機関として淀川を利用した旅客専用の船『三十石船』が登場した。米を三十石積めることから三十石船と呼ばれた。

京都と大阪間（約 45Km）を繋ぐ快速船で 「早舟三十石」と呼ばれ、現代の新幹線のようなものだった。多いときには 162 隻が就航し、24 時間上り下りをしたので一日合計 320 便、約 9000 人が往来した。当時としては、日本の最も重要な交通機関であった。

全長約 17m.幅約 2.5m で乗客定員 28 人～30 人、船頭は 4 人と決められていた。上り船は、大阪天満橋を早朝出て夕方には京都伏見着、下り船は伏見を夜に出て、早朝大阪に着くのが通例だった。

船は棹をさして上る所もあったが、大変な労力と時間をかけ全長約 45Km の殆どを綱で引き上げながら伏見まで上った。船賃は上りで 172 文、下りは 72 文であった。(享保年間 1716～1735) (1 文約 30 円)

この船の乗客が飲食に使っていた器が『くらわんか碗』で、庶民でも使える磁器の代名詞となり全国に普及した。

くらわんか舟

途中の船着き場には遊郭が多く、特に枚方宿は一番の盛り場であった。枚方を中心に上下 4Km の区間を通る三十石船に、2 名程度乗船の小舟で近づき、昼夜を問わず飲食物を販売していた。その船が「くらわんか舟」である。

船上に火床を置いて煮炊きし、停船しようとする三十石船に鍵爪をかけて接舷、乗客達に「飯くらわんか、酒くらわんか」と乱暴な言葉を掛け、ゴボウ汁や餅、巻きずし、酒などを提供した。

「くらわんか」とは、上方の方言で「喰わないのか」「喰う銭もないのか」と乱暴に言った言葉である。この地方では古くから悪霊を追い払うのに悪態を吐くという習わしがあり、旅の安全や無病息災を願うという意味があった。また餅や汁を売る農民が、普段威張っている武士に対して、乱暴な言葉を投げ付けて商い

をする姿が同乗した旅人から喝采を受け、大変喜ばれたという。

くらわんか碗

『くらわんか碗』は船上での揺れに耐えるよう底が厚く、重心を低くしてあった。昭和 45 年(1970)頃の佐々町教育長であった帆足清勝は市ノ瀬皿山の出土品を見て「粗末でロクロ技術がまずく、そこが厚くて重い。」と評している。

食後に返却された器の数で飲食代を計算したので、器を川に投げ捨てて支払いをごまかす客もあり、『くらわんか碗』が川底から多数発見されている。この様な事から『くらわんか碗』は、いかに安く仕上げるかが問われていた。

近国焼物大概帳

寛政 8 年(1796)に書かれた『近国焼物大概帳』によれば
「平戸領皿山之分 さざ皿山 壱登窯 焼成室 10 室 窯業に携わる人約 60 人 天草の陶石を用いて廉価な磁器を焼いている」と記述してある。

市ノ瀬皿山、閉窯へ

開窯から約 50 年間は 5 家族で操業されていたが、民吉がやって来た時には福本仁左衛門一家族だけになっていた。そして、仁左衛門が亡くなった 2 年後の文政 8 年(1825)、3 代目新右衛門の時に閉窯している。

閉窯した理由としては、肥前以外でも磁器の生産が始まった事による競争の激化、また佐々に窯を開いてから 75 年が経過しており、登り窯の寿命が来ていたこと、この付近で石炭採掘が始まり、平戸藩が焼物から石炭へと重きを移したこと等が考えられる。

吉丸皿山の登り窯は明治の終わりごろまで原型の半分程が残っていたが近くに開かれた炭鉱の坑夫達が焼成室で博奕場を開帳するようになり、土地所有者の吉丸要作が風紀上良くないとして取壊し、畑にしてしまった。登り窯の下を流れる市ノ瀬川の右岸には、陶石を砕くための水車小屋の跡も残っていたが河川改修により姿を消した。

三川内江永福本家

朝鮮出兵を始めた豊臣秀吉は肥前名護屋城にしばらく滞陣した。その折、秀吉は平戸氏 26 代松浦鎮信に命じて優秀な陶工を送るように命じた。鎮信は慶尚道の熊川（コモガイ）の陶工従次貫を呼び、秀吉に引き合わせた。

秀吉は早速焼物窯を作らせて茶器を製作させたが、作品は期待をはるかに超えるものであった。秀吉は従次貫を激賞して福本の姓を与え、名も彌次右衛門と改めさせた。

その後、福本彌次右衛門(従次貫)は唐津領内椎ノ峰に窯を開き作陶に励んでいたが、同じ朝鮮熊川出身である巨関の長男今村三之丞の求めに応じて三川内江永山に移住した。跡を継いだ息子の新治右衛門も作陶に励み、特に濃茶用の優れた作品を残している。

新治右衛門の跡が 3 代目の久乃丞で、その弟が佐々市瀬村に窯を開いた福本新左衛門である。民吉に佐々を紹介したのが 4 代目の福本喜右衛門で、民吉を引き受けた仁左衛門とは従兄弟同士である。

佐々福本家

本家

初代 新左衛門安中 宝暦元年(1751)開窯 天明 6 年(1786)没

二代 仁左衛門安道 喜蔵(民吉を指導)

文政 6 年(1823)没、2 年後閉窯

三代 新右衛門安布(やすのぶ) 小助 文政 12 年 7 月没 49 才

四代 新右衛門安春 忠六 文久 3 年(1863)8 月没 54 才

文政 12 年 12 月 石炭山見計役被仰付 20 才で就任

五代 忠太郎安孝 新造(姓が福本から福原へ)

六代 福原邸治 (明治 33 年佐々小学校卒業)

佐々町民の中の民吉

「民吉は産業スパイだ」と語られる事もあるが、民吉が市ノ瀬皿山を去った翌年の文化 5 年(1808)5 月、3 代目となる福本新右衛門に対し、前藩主松浦静山

(清)から下された「焼物御用被仰付為」(オオセツケナサル)との書状が残っている。

また閉窯から4年後の文政12年(1822)、平戸藩は4代目新右衛門(20才)を近くの谷奥に開かれた炭鉱の石炭売買をつかさどる役人として登用している。この様に平戸藩は民吉の件について、全く意に介していなかったと思われる。

昭和31年版(210ページ)の中、6ページを割いて民吉について記述されているが、最後に『市ノ瀬皿山の跡は、今は人々に忘れられようとしているが、日本の陶磁器を代表する大生産地、瀬戸の技術が、この地から伝わった事実は佐々町民の大きな誇りである。』と締めくくられている。

佐々皿山加藤民吉就習業之地(正面)

翁は尾州瀬戸村の人なり 遠来より磁業を究めんと欲して この地に寓す市之瀬皿山福本仁左衛門家留まること二年 師その志に感じて愛顧を加え悉く染付の法を授け而してまた業を継ぐことを欲す民吉深謝にいたり辞去する この時文化四年孟春(初春)なりここに記録にもとづいて 謝恩の意を表し 永く記念と為す
津金胤明書 川口高風撰文(右側面)

昭和五十五年九月 尾張旭市 加藤庄三の遺志により嗣子正高之を建てる(左側面)

昭和33年4月14日、加藤庄三氏初めて佐々を訪問、民吉の調査開始、4年をかけて佐々町を6回訪問、佐々町民が好感を持って民吉を受け入れていると感じて、それに報いるべく、記念碑建立を決意した。

加藤庄三氏 昭和54年5月26日 逝去

第二部

中国の磁器の登場から『くらわんか碗』へ

中国磁器の始まり

中国では今から約1500前、世界に先駆けてガラス質の焼物『磁器』を生み出した。磁器は中国の宮廷で用いられたのみならず、主要な貿易品の一つとして、アジア、イスラム圏、ヨーロッパなどにも大量に輸出され、王侯貴族のコレクション

ヨンとして愛された。

隋（581-618）、唐（618-907）の時代になると磁器の生産が本格化した。鉄分の少ないカオリン質の高い白い素地に、不純物の少ない良質な灰釉をかけ、高温で焼成した青白磁が作られるようになった。当時は「南青北白」といわれ、南部では青磁、北部では白磁を焼く窯が多かった。

中国磁器の輸入

西暦 907 年、唐が滅び、宋の時代になると日中間の貿易が活発になり、従来の主たる輸入品であった漢籍や仏典などの書物、仏像などの美術工芸品に加えて陶磁器の輸入が増加した。

福岡市内の博多遺跡群からは、12 世紀頃(1100 年代) 浙江省の龍泉窯で大量生産されたと思われるおびただしい数の青磁、白磁の輸入陶磁器が出土している。日宋貿易によって博多は繁栄し、大唐街と呼ばれる中国人の居住区も形成された。

平氏と日宋貿易

平清盛の父である忠盛は、貿易がもたらす利益に着目、皇室領であった肥前国神埼荘(吉野ヶ里遺跡)の荘官となり、有明海、筑後川ルートを使って、博多を通さない独自の日宋貿易を行い、そこで得た財力で唐物好みの鳥羽上皇に取り入り、その近臣となった。

忠盛の息子である平清盛も大宰大弐(太宰府長官)の地位について博多と日宋貿易を支配下に置き、そこから得られる莫大な利益をもとに平氏政権を樹立した。

肥前磁器の始まり

肥前磁器の始まりは、1592 年から 1598 年にかけて行われた豊臣秀吉による朝鮮出兵である。この戦いは別名「焼き物戦争」とも呼ばれ、西国の大名たちは、朝鮮陶磁器の技術を導入すべく多くの陶工たちを伴って帰国した。

特に肥前有力者の先祖達は遠い昔から中国・朝鮮との交易に深く関わっており、交易品としての陶磁器の価値をどこよりも強く認識していた。

朝鮮の陶磁器

朝鮮陶磁器の歴史は、紀元前 5000 年頃の土器登場に始まる。高句麗(こうくり)・新羅(しらぎ)・百濟(くだら)の時代になると、土器に釉薬をかけて低い温度で焼く緑釉(りょくゆう)陶器が現れた。

高麗(こうらい)時代〔918~1392 年〕には、青磁と白磁が焼かれるようになり、様々な技法が発案されて高麗青磁特有の姿が産まれた。

李氏朝鮮時代〔1392~1910〕になると、高麗青磁に白い土でさまざまな装飾を施した『粉青』(日本の三島)が新たに登場し、粗い刷毛の跡が残る『刷毛目』、白泥の中に浸しがけする『粉引』が産まれた。これらは日本に輸入され、「高麗茶碗」と呼ばれて珍重された。

一方朝鮮において白磁は王の器とされ、朝鮮王朝の統治理念であった儒教思想にふさわしい、清潔で簡素なものであり、永く主役の座をしめた。

有田焼

佐賀の鍋島家当主直茂も朝鮮に出兵、朝鮮各地を転戦したが、秀吉の死去により戦は終結した。直茂は帰国の際、多数の朝鮮の人々を連れて帰還した。

この中に「李參平」という優れた陶工がいて、領主の保護奨励を受け、母国朝鮮でできる白磁器がこの土地で作れないものかと領内の山々に分け入り探索を重ねた。そして、1616 年遂に有田泉山で磁器の原料となる陶石を発見した。

その後、「李參平」は一族を指揮して、白磁器の創製に没頭し、ついに従来の陶器とは比較にならない純白で透明感のある画期的な磁器を焼成した。

(大正以降から天草陶石を使用・戦国時代頃から上質の砥石として全国に普及)

波佐見焼

波佐見村の領主であった大村喜前(よしあき)も、朝鮮陶工の李祐慶らを引き連れ帰国した。陶工たちは有田に隣接する村木地区に窯を作り、1620 年頃には磁器の焼成に成功した。その後、中尾地区三股(みつのまた)で良質の陶石が発見されたことから本格的に磁器の生産を始めた。

1650 年頃に中国で起きた内乱で、中国産の焼き物の輸出が中断、その代わりとして肥前の焼き物が東南アジアを中心に輸出された。波佐見焼の生産量は一気に増加、窯の数も増えて職人他、窯業に携わる人口も急増した。

1690 年ごろに中国の内乱が収まると、海外への磁器輸出はほぼ壊滅したが、国内向けの日用食器へシフトする事により、庶民でも使える磁器、いわゆる『くらわんか碗』が全国に広まった。江戸時代の中頃には、全長約 160 メートルという巨大な登り窯も築かれ、生産量も飛躍的に向上した。
(明治以降天草陶石を使用)

三川内焼

平戸氏 26 代松浦鎮信も朝鮮からの帰国に際し、多数の朝鮮人陶工を伴い帰還した。そして、その中でリーダー的存在だった慶尚道の熊川（コモガイ）出身である巨関（こせき）に命じて平戸島中野村に焼物窯を開かせた。後に巨関は、帰化して藩士の処遇を受け今村姓を名乗った。

1622 年頃から巨関は、磁器の原料である陶石を探し求めて、息子の今村三之丞と共に領内をくまなく踏査し、寛永 10 年（1633）に針尾島（はりおじま）で〔網代（あじろ）陶石〕を発見した。

1650 年今村三之丞他、陶工達は平戸中野村から針尾島近くの三川内へ移住を命じられ、三川内焼の生産が始まった。

寛文 2 年（1662）からは三之丞の子・今村弥次兵衛（いまむらやじべえ）（号、如猿）が、天草陶石と網代陶土との調合に成功し、磁器生産が本格化、透かし彫りや置き上げなどの細工も生まれた。（1662 年から天草陶石を使用）

網代陶石

長崎県佐世保市の針尾島網代地区に産することから網代陶石と呼ばれた。

三川内焼は網代陶石と天草陶石を混ぜることにより白磁の白さが際立ち、高い粘性と乾燥収縮性も増して、三川内焼特有の極薄成形の「卵殻手」や「ひねり物」「透かし彫り」の名品が生まれた。（1662 年から天草陶石を使用）

清朝の海禁策と肥前磁器

(長崎大学多文化社会学部 野上建紀)

1644年、中国では明に代わって清(1644~1912)の時代が始まった。しかし、明(1368~1644年)の復活を図る抵抗勢力との戦いが続いており、特に南部の沿岸地域は攻防の真ただ中にあった。中でも鄭成功は貿易で得た財力を背景に海軍力(兵船約300隻)による頑強な抵抗を繰り広げた。

1656年、清王朝はその対抗策として、鄭成功の資金源を断つべく海禁策(一種の鎖国政策)を発令した。これにより、景德鎮産を始めとする中国磁器の海外輸出が激減した。

海禁策発令にともない中国の貿易業者やオランダ商館はその穴埋めを肥前の磁器に託した。肥前磁器生産者達は、この降ってわいたチャンスに因應べく、技術革新を行い、磁器の大量生産が始まった。

有田や波佐見など、その周辺の窯場は海外からの受注増で急成長し、輸出先は東南アジアをはじめ、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、そして、アメリカ大陸など世界各地に広がって行った。

柿右衛門様式と鄭成功 (鄭成功が仕掛けた伊万里開発 専修大学 池本正純)

有田焼の柿右衛門様式の磁器は、乳白色の生地(濁手にごしで)に、上品な赤を主調とし、余白を生かした絵画的な文様を描いたもので、初代酒井田柿右衛門が苦心の末、創始したものとされている。

しかし、この柿右衛門様式は、清の海禁政策により景德鎮の陶磁器を扱えなくなった鄭成功が有田に目を付け、景德鎮の赤絵の技術を持ち込み有田の窯場で生産されたものであることが判明した。

清の海禁政策中、有田焼の製造技術は大きな進歩を遂げ、中国式に変化した。中国の磁器職人が有田に来て、技術指導をしたようで、窯詰技法、赤絵などの装飾技法や窯詰に用いる道具などに及び、薄手でシャープな製品ができるようになった。

鄭成功（てい せいこう、日本名は田川福松）

鄭成功（1624年8月27日-1662年6月23日）は、肥前国松浦郡の平戸で生まれた。

清に滅ぼされようとしている明を擁護して、明朝を復活させるべく、抵抗運動を続け、のちに台湾に渡りオランダ軍（東インド会社）を討ち払って台湾全土を掌握し、鄭政権の祖となった。今でも台湾では孫文、蒋介石とならぶ「三人の国民の父」の一人として尊敬されている。

鄭芝龍（てい しりゅう）

鄭芝龍（ていしりゅう）は福建省泉州府の人で鄭成功の父である。貿易商、海賊として活躍し、長崎出島貿易にも深くかかわり、徳川幕府も一目置く存在だった。

中国語、日本語、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語を話し、スパニッシュ・ギターも弾きこなしたという。日本の剣術も習得し、平戸氏 28 代宗陽隆信の信頼を得て平戸川内浦（現在の長崎県平戸市川内浦）に住み、平戸藩士田川七左衛門の娘であるマツと結婚して、鄭成功が産まれた。

中国磁器の復活

海禁策下の 28 年間、中国磁器業界では、海外需要分を国内需要に振り向けるため、低コスト化による量産が図られた。

1662 年鄭成功が病死し、反乱が沈静化すると清は 1684 年、海禁策から展海策（貿易自由化）へと舵を切った。

再び景德鎮や福建・広東産の中国磁器が海外市場に出回るようになった。特に東南アジア市場では押型成形による低価格の碗・皿が広く流通するようになり、中国磁器の需要が以前にも増して広まった。

この清朝の貿易制限撤廃により、肥前磁器の海外市場は中国磁器に奪い返された。特に最大の市場であった東南アジアでは、肥前磁器製品はほぼ壊滅した。清朝の海禁策と展海策が、いかに肥前の磁器に与えた影響が大きかったかが理解できる。

くらわんか碗の登場

有田と比べて海外需要の占める割合が高かった波佐見は余った生産能力を新たな市場に振り向けなくてはならず、それを国内市場に求めた。

それまで高価な磁器を使用出来なかった階層を低コスト化によって取り込み、新たな需要を開発した。それに追随して有田、三川内においても低価格の磁器生産が始まった。

いわゆる『くらわんか碗・皿』が日本全国に普及した。結果的には日本への中国磁器の再輸入を防ぐことになった。

第三部 加藤民吉

九州へ出立する前の加藤民吉

加藤民吉は明和8年（1771）2月20日、尾張国春日井郡瀬戸村（現・瀬戸市）にあった大松窯の窯元である加藤吉左衛門の次男として生まれた。幼名を松次郎と言った。

当時の瀬戸は、大消費地である江戸・大坂・京都の商人らによる代金踏み倒しの横行、加えて肥前磁器（南京焼）や信楽陶器の台頭により販路を圧迫されていた。経営難に陥る窯元も増加し、生産調整を余儀なくされており、天明4年（1784）には尾張藩が「窯屋1軒にロクロ1挺、窯を継ぐのは長子のみ」とする統制令を出した。

大松窯を長兄の晴生（加藤吉右衛門）が継いだことにより、陶工としての生計を断たれた民吉は享和元年（1801年）、隠居となった父・吉左衛門と共に熱田前新田（現在の名古屋市港区）の入植者として名古屋に移り住んだ。そして、そこで新田開発を指揮していた熱田奉行・津金胤臣と出会うこととなる。これが民吉のドラマチックな人生の『きっかけ』となった。

胤臣は、開墾状況見分のためしばしば新田を訪れたが、鋤使いに不慣れな元陶工と目される入植者を目にする事も多く、瀬戸窯業の不振を肌で感じていた。胤臣は、かねてから『南京焼』と呼ばれ、江戸、大阪、京都等大都市の市場を席卷していた肥前磁器に関心を持っていたに違いない。これを瀬戸で焼成できれば瀬

戸窯業界の復興、藩財政の改善にも寄与する事は間違いなく、一石二鳥だと考えていたはずだ。

胤臣は熱田前新田入植者の中から元陶工であった者の素性を新田庄屋に調べさせた。そして、瀬戸の陶祖加藤景正につながる家系である大松窯の前当主加藤吉左衛門に白羽の矢を立てたのである。胤臣は吉左衛門を屋敷に招き、入手していた清国の『陶説』を授けたりして、染付磁器（南京焼）の製造取り組みを進言している。

早速、吉左衛門の縁戚である瀬戸村庄屋加藤唐左衛門が中心となり、民吉の兄加藤吉右衛門晴生等も加わって磁器の開発を始めた。また尾張藩も開発資金として80両もの大金を与えて支援している。

享和3年(1803)には、磁器専用の丸窯が築かれたようで、一応磁器の完成を見たが、肥前磁器の品質には遠く及ばなかった。結局誰かを肥前に送り、磁器の製法を学ばせるより他はないとなり、吉左衛門の次男民吉を候補に決め、尾張藩に嘆願した。

曹洞宗寺院の連携が成し遂げた偉業

願いは直ぐに認められ、民吉の九州行きが決まった。幸運にも菱野村（現・瀬戸市菱野町）の出身で、かつて一色村(名古屋市名東区)神蔵寺の住職であった上藍天中が、磁器の窯がある天草の東向寺住職に就いており、また東向寺で勤めていた学道祖英が隣村(春日井郡大森村・現在の名古屋市守山区)の法輪寺に戻っていた。

藩に願い出て旅費を拝借し、学道祖英が書き記した天中宛の紹介状を携えて、民吉が瀬戸を出立したのは文化元年（1804）2月22日、約1か月の旅程を経て3月末に天草に入った。民吉33歳の時である。

天中の口利きで上田源作（高浜村の庄屋で窯元）の皿山に住み込んだ民吉は、そこで4月から8月まで研修した後、肥前磁器の技術を学ぶべく天中からの書状を携え9月初旬天草を離れた。

民吉は、まず長崎に渡り『長崎くんち』を見物し、その後、彼杵郡佐世保村（現在の佐世保市）にある西方寺16世・慈明洞水を尋ねた。洞水はかつて一色村神

蔵寺の5世(6世が天中)であり、民吉をことのほか厚遇した。

民吉は同寺にしばらく留まった後、洞水の紹介で折尾瀬村(現・佐世保市三川内町)の薬王寺住職・玄珠舜麟を訪ねた。舜麟の助力で平戸藩の藩窯・三川内皿山の今村幾右衛門の窯に雇われることになったが、職に就くまで日数があったので一旦天草に戻り、天中や上田源作に三川内入りを伝えている。

12月16日から今村幾右衛門窯で10日ほど働いたが、村の庄屋から「他国の者は置けない」と言い渡され、民吉は薬王寺に戻らざるを得なくなった

舜麟和尚は、それならと江永村(現・佐世保市江永町)の福本喜右衛門を紹介した。早速民吉は喜右衛門を訪問、そこで喜右衛門から佐々市ノ瀬村(現・佐々町鴨川免)に住む従兄弟の福本仁左衛門の窯が人手不足なので、そこに行ってみてはと勧められた。

民吉はすぐさま西方寺に立ち返り、洞水の書状を得て佐々村の東光寺住職呉峰巖太に会い、寺僧の案内で市ノ瀬皿山に向かった。市ノ瀬皿山は当初、5家族で操業していたが、この時は一家族だけになっており、人手が足らず困っていた仁左衛門は喜んで民吉を受け入れた。文化元年12月28日のことである。

佐々での民吉

元々陶工であった民吉は半年程で1日茶碗300個作るようになり、またその出来栄も良く仁左衛門を喜ばせた。民吉の技量から、瀬戸はさぞ窯業が盛んな土地に違いないと思った仁左衛門は瀬戸に引っ越したいと言い出す始末で、民吉を困らせた。

文化2年の秋、仁左衛門と息子小助が伊勢参りに出かけたが、その間、民吉が任されて一窯焼き上げてみたところ出来栄が良く、帰ってきた仁左衛門を喜ばせた。その後仁左衛門に頼み込みやっとならぬと釉薬・絵薬の調合を伝授された。1年足らずで目的を果たした民吉は暇乞いを願い出たが、仁左衛門はここに定住して倅新右衛門を何とか助けてほしいと懇願し、引き留めた。

帰国を急ぐ民吉は、住職交代式の主賓とし東光寺を訪れた天中に、「天草に帰られたら、私が急ぎ天草に戻るように、との手紙を出して欲しい」と依頼した。後日天中から手紙が到来、民吉はそれを仁左衛門のまえで開封し、1年間のお礼奉

公を条件に、何とかに左衛門を説き伏せた。文化4年(1807年)1月7日、民吉は仁左衛門に別れを告げ佐々を去った。

佐々出立後の民吉

しかし、民吉は、真っ直ぐ瀬戸村に帰ろうとはしなかった。民吉は有田焼の上絵の技法を習得すべく、天草出身の振りをして有田の上絵屋を訪れたが、鍋島藩の情報統制の厳しさから徒労に終わる。その後、民吉は有田の築窯業と思われる堤惣右衛門に30日ほど住み込んで丸窯の築窯方法を習得した。

有田を立った民吉は改めて天草に戻り、天中や上田源作に礼を述べ、これまでの研修について仔細にわたり報告した。源作はこの時、民吉の使命感にほだされたのだろうか、錦手の技法を伝授している。その代わりとして、瀬戸で使っている藍色の顔料呉須と瀬戸焼の茶器を所望し、送るように依頼している。しかし、民吉はこの約束を守らなかった。

東向寺から通行手形をもらい受け、旅費5両を拝借した民吉は5月13日に帰途に就いた。途中宇土半島にあった網田(おうた)村の柳本勝右衛門窯を見学、さらに博多で箱崎八幡宮にも立ち寄り、その後伊勢神宮にも参詣している。そして、佐々を出て約半年後の文化4年6月18日に瀬戸へ帰り着いた。

成果は直ぐに現れた。同年(1807年)内に44軒の窯で磁器製造が新たに始まり、15年後の文政5年(1822)には磁器を焼く窯元が91軒となった。新たに始まった磁器を「染付焼」、旧来よりあった陶器を「本業」と呼ぶことが定められ、瀬戸染付焼は京・大阪・江戸にも出荷されるようになり、瀬戸窯業は復興した。

佐々町 拙 由典(みかづき ゆうすけ)